HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	分散と標準偏差の分解
著者	木村,和範
引用	開発論集,83: 145-165
発行日	2009-03-30

《研究ノート》

分散と標準偏差の分解

木 村 和 範*

もくじ

はじめに

- 1. 総変動の分解
- (1) 基準時点における総変動とその分解
- (2) 簡便式の誘導
- (3) 数值例
- 2. 総分散の分解
- (1) 分解式
- (2) 数值例
- 3. 総変動の差の分解
- (1) 分解式
- (2) 級間変動の差の分解
- 4. 総分散の差の分解
- (1) 分解式
- (2) 寄与率
- (3) 数值例
- 5. 総標準偏差の差の分解
- (1) 分解式
- (2) 数值例

むすび

はじめに

所得分布に対数を用いる統計的計測は,低額所得階層の所得変化にたいして敏感に反応する。そのことがメリットであると考えられている。この特性を逆から見れば,対数変換が高額所得階層の所得変化には鋭敏性を欠くことを意味する(10の常用対数は1であるが,100の常用対数は2となるように,元の値(真数)が大きくなるにしたがって,より小さな値が対数として返される)。たとえば、500万円の世帯所得は250万円の世帯所得の2倍であるが,対

数変換によって所得の常用対数は、それぞれ 6.7 と 6.4 となり、倍率は 1.05 倍に圧縮され る (自然対数の場合には、それぞれ 15.4 と 14.7 となって倍率は同じく 1.05 倍である)。「対数変 換を行うことによって数値の乖離が減少する ために、不平等を表現する際の強烈さが緩和 されることになるが、他方ではそのために ……最も低い水準の近傍における所得格差が 相対的に目立つことになる」りというセンの 指摘はこの間の事情を言い当てている。

このように指摘されているにもかかわらず、原系列に対数変換を施した統計量である対数分散や平均対数偏差が、所得格差の指標として使用されている。それは、これらの指標が所得格差を①年齢階層内変動(級内変動)と②年齢階層間変動(級間変動)に要因分解し、所得格差の構造把握が可能であると考えられているからである。また、対数分散や平均対数偏差の値の増加(減少)は、①年齢階層内変動の寄与分、②年齢階層間変動の寄与分、②階級を構成する世帯数(人数)変動の寄与分

¹⁾ Sen, Amartya, *On Economic Inequality*, Expanded Edn., with James E. Foster, Oxford 1997. ただし, 引用は鈴村興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学』東洋経済新報社, 2000 年, p.36f. による。

^{* (}きむら かずのり) 開発研究所研究員, 北海学園大学経済学部教授

表1 データの組と統計量

階級	変量	個数	階級別平均	階級別分散
1	${}^{0}\mathcal{X}_{11} \; {}^{0}\mathcal{X}_{12} \; \cdots {}^{0}\mathcal{X}_{1}{}^{0}{}_{k_{1}}$	${}^{0}k_{1}$	0 <i>x</i> ₁	$^{0}\sigma_{1}{}^{2}$
2	${}^{0}\chi_{21} \; {}^{0}\chi_{22} \; \cdots {}^{0}\chi_{2^{0}k_{2}}$	${}^{0}k_{2}$	0 √0 √2	⁰ σ ₂ ²
		:	:	
i	${}^{0}\chi_{i1} \; {}^{0}\chi_{i2} \; \cdots {}^{0}\chi_{i^{0}k_{i}}$	${}^{0}k_{i}$	$\overline{{}^0\chi_i}$	$^{0}\sigma_{i}^{2}$
			:	
m	${}^{0}\chi_{m1} {}^{0}\chi_{m2} {}^{0}\chi_{m^{0}k_{m}}$	$^{0}k_{m}$	$\overline{{}^0\chi_m}$	$^{0}\sigma_{m}^{2}$
総合計	$\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_1,0} \sum_{j=1}^{k_2,\cdots,0} k_m 0 \chi_{ij}$	$^{\scriptscriptstyle 0}N=\sum\limits_{i=1}^{m}{}^{\scriptscriptstyle 0}k_i$		
総平均	$\frac{1}{\sqrt[n]{x}} = \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0} \sum_{j=1}^{N_{i,0}} x_{i,0}^{2} x_{i,0}}{\sqrt[n]{N}} x_{i,j}}{\sqrt[n]{N}}$			
総分散	${}^{0}\sigma^{2} = \frac{1}{{}^{0}N} \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{o_{k_{1},0}k_{2},,0} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x})^{2}$			

に分解され、そのために、格差構造のより詳細な分析が可能であることも、それらの計測指標が有効であることの論拠になっている。 そして、要因分解から、①格差の拡大は人口構成の高齢化(人口動態変化)によること、② 人口動態効果による格差の拡大は「見かけ上」にすぎないことなどが指摘されている²⁾。

上に述べた有効性は対数変換を用いる対数 分散や平均対数偏差に固有の特性であろう か。これらの計測指標によらなければ、変動 の要因分解は不可能であろうか。対数変換は 必要不可欠な操作であろうか。本稿はこれら の検討を課題として、対数変換が施されてい ない原系列の分散に着目し、その要因分解を 試みる。さらに、この試みを拡充して、グルー プ分けされたそれぞれの階級を構成する個体 数の総体的な数量的変化(これを構造的変化と 言うことにする)が果たす寄与を計測するため の計算式を誘導する。そして、この構造的変 化による分散の増減が、「見かけ上」の変化であるかどうかを検討するとともに、分散の増減を要因分解することによって、構造的変化の主因とされる階級を特定することが可能かどうかを検討する。また、分散の要因分解をもとにして、標準偏差の差の要因分解についても言及する。

1. 総変動の分解

(1) 基準時点における総変動とその分解

基準時点 (0) における変量を ^{0}x とする。この変量 ^{0}x が m 個の階級に分類され,それぞれの階級に落ちる変量の個数を $^{0}k_{i}$ とすると,基準時点における変量の組と関連統計量は上のようにまとめることができる (表1)。

この変量の組について、 ${}^{\circ}x_{ij}$ の総平均を $\overline{{}^{\circ}x}$ とおくとき、総変動 ${}^{\circ}V_{T}$ は

$${}^{0}V_{T} = \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0} {}^{k_{1}, 0} \sum_{k_{2}, \cdots, 0}^{k_{2}, \cdots, 0} {}^{k_{m}} \left({}^{0}\chi_{ij} - \overline{{}^{0}\chi} \right)^{2}$$
 (1)

である。

この総変動 V_T を級内変動 V_I と級間変

²⁾ 内閣府『経済財政白書』(2006 年版, p.262f., 2007 年版, p.233)

動 ${}^{\circ}V_{A}$ に分解する目的で,基準時点において第i階級に属す変量 ${}^{\circ}x_{ij}$ とその総平均 $\overline{{}^{\circ}x}$ の偏差二乗和 $\sum_{i=0}^{\circ}({}^{\circ}x_{ij}-\overline{{}^{\circ}x})^{2}$ を以下でもとめる。

$$\sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x})^{2}$$

$$= \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}} + \overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2}$$

$$= \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2}$$

$$+ 2 \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}})(\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})$$

$$+ \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2}$$

$$= \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2}$$

$$+ 2 \sum_{j=1}^{0_{k_{i}}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}})(\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})$$

$$+ {}^{0}k_{i}(\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2}$$
(2)

(2)式第 2 項の $\sum_{j=1}^{o_{ki}} (\circ_{x_{ij}} - \overline{\circ_{x_i}}) (\overline{\circ_{x_i}} - \overline{\circ_{x}})$ を整理すれば,次のようになる。

$$\begin{split} &\sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} (^{0}x_{ij} - \overline{^{0}x_{i}})(^{0}x_{i} - \overline{^{0}x}) \\ &= (^{0}x_{i} - \overline{^{0}x}) \sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} (^{0}x_{ij} - \overline{^{0}x_{i}}) \\ &= (^{0}x_{i} - \overline{^{0}x}) \left(\sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} {^{0}x_{ij}} - \sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} {^{0}x_{i}} \right) \\ &= (^{0}x_{i} - \overline{^{0}x}) \left(\sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} {^{0}x_{ij}} - {^{0}k_{i}} \overline{^{0}x_{i}} \right) \\ &= (^{0}x_{i} - \overline{^{0}x}) \left(\sum_{j=1}^{n_{k_{i}}} {^{0}x_{ij}} - {^{0}k_{i}} \overline{^{0}x_{ij}} \right) \\ &= 0 \\ &\downarrow \text{Total} \quad \text{Total}$$

となる。この(3)式右辺の第1項は級内変動 ${}^{\circ}V_{I}$ を示し,第2項は級間変動 ${}^{\circ}V_{A}$ を意味する。したがって,総変動 ${}^{\circ}V$ [(1)式] は

$${}^{0}V_{T} = {}^{0}V_{I} + {}^{0}V_{A}$$
 (4)

に分解できる。

ここまでは、分散分析を取り扱う数理統計 学教科書のレベルである。

(2) 簡便式の誘導

(3)式の値を計算するための簡便式を誘導する。これもまた、初等統計学的な叙述であることをあらかじめ断っておく。(3)式左辺 $^{\circ}V_{T}$ は次のようになる。

$$\begin{split} &\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}(0\chi_{ij}-\overline{0\chi})^{2} \\ &=\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}(0\chi_{ij}^{2}-2\cdot 0\chi_{ij}\cdot\overline{0\chi}+(\overline{0\chi})^{2}) \\ &=\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}-2\cdot\overline{0\chi}\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}+\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}(\overline{0\chi})^{2} \\ &=\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}-2\cdot\overline{\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}}\cdot\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij} \\ &+0N\left(\overline{\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}-\left(\overline{\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}\right)^{2}\right.\\ &=\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}-\left(\overline{\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{n_{k_{1,0}k_{2,\cdots,0}k_{m}}}0\chi_{ij}^{2}\right)^{2}=0\,V_{T} \end{split} \tag{5}$$

他方で、(3)式右辺第 2 項 ${}^{\circ}V_{A}$ は次のようになる。

$$\begin{split} &\sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} (\overline{o_{x_{i}}} - \overline{o_{x}})^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left\{ (\overline{o_{x_{i}}})^{2} - 2 \cdot \overline{o_{x}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} + (\overline{o_{x}})^{2} \right\} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} (\overline{o_{x_{i}}})^{2} - 2 \cdot \overline{o_{x}} \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} + \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} (\overline{o_{x}})^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} (\overline{o_{x}})^{2} - 2 \cdot \overline{o_{x}} \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} + \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} (\overline{o_{x_{i}}})^{2} \\ &+ \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} - 2 \cdot \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \\ &+ \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} - 2 \cdot \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \cdot \sum_{j=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2} - 2 \cdot \frac{\left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} {}^{0}k_{i} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \cdot \overline{o_{x_{i}}} \right)^{2}}{\overline{o_{x_{i}}}} \right)^{2} \end{aligned}$$

表 2 総変動 ${}^{\circ}V_{T}$ のための計算表 ((5)式)

2000 MR 4000	松	は、一般の関係を対象を表現しています。	第一の書校 第一の書校	路級 引亚拉*	陈级别公勤*
	夕 串	国数	≪≡の一米	FB NX JULY 20	FEINXJJJJ BX
	$^0\mathcal{X}_{11}$ $^0\mathcal{X}_{12}$ $^0\mathcal{X}_{1}^{\circ}{}_{k_1}$	$^{0}k_{1}$	$^0\chi_1^2$ $^2\chi_{12}^2$ $^0\chi_{10k_1}^2$	$-\frac{1}{2}\chi_1^0$	${}^{0}\sigma_{1}^{2} = \frac{1}{{}^{0}k_{1}} \sum_{j=1}^{{}^{0}k_{1}} ({}^{0}\chi_{1,j} - \overline{0}\chi_{1})^{2}$
	$^0\mathcal{X}_{21}$ $^0\mathcal{X}_{22}$ $^0\mathcal{X}_{20}$	$^{0}k_{2}$	$0_{\chi_{21}}^2$ $0_{\chi_{22}}^2$ $0_{\chi_{20}k_{2}}^2$	°22	$^{0}\sigma_{2}^{2} = \frac{1}{^{0}k_{2}} \sum_{j=1}^{^{0}k_{2}} (^{0}\chi_{2j} - \overline{^{0}\chi_{2}})^{2}$
	${}^0\mathcal{X}_{i1}$ ${}^0\mathcal{X}_{i2}$ ${}^0\mathcal{X}_{i}{}^0k_i$	$^{0}k_{i}$	$^0 \mathcal{N}_{i1}^{2} ^{0} \mathcal{N}_{i2}^{2} ^{2} \cdots ^{0} \mathcal{N}_{i}^{0} k_i^{2}$	χ_i^0	${}^{0}\sigma_{i}^{2} = rac{1}{{}^{0}k_{i}} \sum_{j=1}^{{}^{0}k_{i}} ({}^{0}arkappa_{ij} - rac{{}^{0}arkappa_{i}}{{}^{0}arkappa_{i}})^{2}$
1					
	$^{0}\chi_{m1}$ $^{0}\chi_{m2}$ $^{0}\chi_{m}^{0}$ $^{0}\kappa_{m}$	$^{0}k_{m}$	$^{0}\mathcal{N}_{m1}^{2}$ $^{0}\mathcal{N}_{m2}^{2}$ $^{0}\mathcal{N}_{m0}^{p}$	$u_{\mathcal{X}_0}$	$^{0}\sigma_{m}^{2} = \frac{1}{^{0}k_{m}} \sum_{j=1}^{^{0}k_{m}} (^{0}\chi_{m_{j}} - ^{0}\chi_{m})^{2}$
総合計	$\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0,k_1,0,k_2,\cdots,0,k_m} \chi_{ij}$	$^{0}N=\sum\limits_{i=1}^{m}{^{0}}k_{i}$	$\sum_{i=1}^{m} {^{o_{k_{1}, i}, o_{k_{2}, \cdots}, o_{k_{m}}}} {^{c_{k_{1}, i}}}^{2}$		
i	$\left(\sum_{t=1}^{m} {}^{0k} {}^{1,0} {}^{k} {}^{2} {}^{\cdots} {}^{\cdot,0} {}^{k} {}^{m} {}^{0} {}^{k} {}^{i} {}^{j}\right)^{2}$	総平均*	$= \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0 k_1, 0 k_2, \dots, 0 k_m} N_{ij}$	総分散*	${}^{0}\sigma^{2} = \frac{1}{{}_{0}N} \sum_{i=1}^{m} {}^{o_{k_{1},o_{k_{2},\cdots,o_{k_{m}}}}} ({}^{o}\chi_{ij} - \overline{{}^{o}\chi_{j}})^{2}$
	$\frac{\left(\sum\limits_{i=1}^{m}{}^{0k}{}^{1,0}\stackrel{N_{2,1}\cdots,0k}{\underset{j=1}{m}}{}^{0}\mathcal{X}_{ij}\right)^{2}}{0N}$				
	$\sum_{i=1}^{m} {^{0}k_{1}, {^{0}k_{2}, \cdots, {^{0}k_{m}}} \choose {j=1}} {\left(\sum_{i=1}^{m} {^{0}k_{1}, {^{0}k_{2}, \cdots, {^{0}k_{m}}} \choose {j=1}} \right)^{2}} $	参 * *	$\sum_{i=1}^{m} {}^{0k_{11}0} {}^{k_{21}\cdots 0k_{m}} {}_{0}\chi_{ij}^{2} - \left(\sum_{i=1}^{m} {}^{0k_{11}0} {}^{k_{21}\cdots 0k_{m}} {}_{0}\chi_{ij} \right)^{2} \\ 0 N$		

*は、 v_T の計算には直接の必要がない参考値である。 **は、(0)式左辺の値をもとめるときに用いる。

表 3 級間変動 ${}^{\circ}V_{A}$ のための計算表	((6)式)
------------------------------------	--------

階級	変量	個数	階級別合計		
1	⁰ X ₁₁ ⁰ X ₁₂ ····· ⁰ X ₁ ⁰ R ₁	° k ₁	$\sum_{j=1}^{0} {}^0\mathcal{X}_{1,j}$	$\left(\sum_{j=1}^{0k_1}{}^0\mathcal{X}_{1j}\right)^2$	$\frac{\left(\sum_{j=1}^{0} {}^{0} x_{1j}\right)^{2}}{{}^{0} k_{1}}$
2	${}^{0}x_{21} \; {}^{0}x_{22} \cdots {}^{0}x_{2^{0}k_{2}}$	$^{0}k_{2}$	$\sum_{j=1}^{{}^{0}}{}^{0}\chi_{2,j}$	$\left(\sum_{j=1}^{0} {}^{0}\mathcal{X}_{2j}\right)^{2}$	$\frac{\left(\sum\limits_{j=1}^{0}{}^{0}\chi_{2j}\right)^{2}}{{}^{0}k_{2}}$
i		:		:	:
i	${}^{\scriptscriptstyle 0}\boldsymbol{\chi}_{i1} \; {}^{\scriptscriptstyle 0}\boldsymbol{\chi}_{i2} \; \cdots \cdots \; {}^{\scriptscriptstyle 0}\boldsymbol{\chi}_{i^{\scriptscriptstyle 0}k_{\scriptscriptstyle I}}$	$^{\scriptscriptstyle{0}}k_{i}$	$\sum_{j=1}^{0} {}^0\mathcal{X}_{ij}$	$\left(\sum_{j=1}^{0k_l}{}^0\mathcal{X}_{ij}\right)^2$	$\frac{\left(\sum\limits_{j=1}^{0k_i}{}^0\chi_{ij}\right)^2}{{}^0k_i}$
i			:	:	
m	${}^{0}\chi_{m1} {}^{0}\chi_{m2} \cdots {}^{0}\chi_{m}{}^{0}{}_{k_{m}}$	${}^{\scriptscriptstyle{0}}k_{m}$	$\sum_{j=1}^{0} {}^{k_m} \chi_{mj}$	$\left(\sum_{j=1}^{0} {}^{0} \mathcal{X}_{mj}\right)^{2}$	$\frac{\left(\sum\limits_{j=1}^{0}{}^{k_m}{}^{0}\chi_{mj}\right)^2}{{}^{0}k_m}$
総合計	$\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{0}\sum_{j=1}^{k_{1},0}k_{m_{0}}\chi_{ij}$	$^{\scriptscriptstyle{0}}N=\sum\limits_{i=1}^{m}{^{\scriptscriptstyle{0}}k_{i}}$			$\sum_{i=1}^{m} \frac{\left(\sum_{j=1}^{0_{k_1,0_{k_2},\cdots,0_{k_m}}} 0_{\chi_j}\right)^2}{\sum_{j=1}^{0_{k_i}} 0_{k_i}}$
	$\left(\sum_{i=1}^{m}\sum_{j=1}^{{}^{0}k_{1},{}^{0}k_{2},\cdots,{}^{0}k_{m}}{}^{0}\chi_{ij}\right)^{2}$				
	$\frac{\left(\sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{0}\sum\limits_{j=1}^{N}{}^{0}X_{i,j}\right)^{2}}{{}^{0}N}$				
⁰ V _A	$\sum_{i=1}^{m} \frac{\binom{\circ_{k_{1}}\circ_{k_{2},\cdots,\circ_{k_{m}}}}{\sum\limits_{j=1}^{m}\circ_{\chi_{j}}}^{\circ}}{k_{i}}^{2} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \binom{\circ_{k_{1}}\circ_{k_{2},\cdots,\circ_{i}}}{\sum\limits_{j=1}^{m}\circ_{k_{1}}}}{\binom{\circ_{k_{1}}\circ_{k_{2},\cdots,\circ_{i}}}{\circ}}{N}$		参考* ⁰ V _I	0	$V_T = {}^0V_A$
参考 ⁰ V _A ⁰ N	$\underbrace{\sum_{i=1}^{m} \frac{\left(\sum_{k_{1},0}^{\alpha_{k_{1}},n_{k_{2}},\dots,0} \alpha_{k_{m}}}{\sum_{j=1}^{m} \alpha_{\mathcal{X}_{j}}\right)^{2}}_{0}}_{0} - \underbrace{\left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0} \sum_{j=1}^{N} \frac{\sum_{j=1}^{m} \alpha_{k_{1}}}{\sum_{j=1}^{m} \alpha_{k_{2}}}\right)^{2}}_{0}}_{0}$	$(k_m - \chi_{ij})^2$	参考*		$\frac{V_T}{N} - \frac{{}^0V_A}{{}^0N}$

 $*^{o}V_{T}$ は表 2 でもとめた。

$$\begin{split} &+\sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0} \chi_{ij} \right)^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i} \left(\sum_{j=1}^{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0} \chi_{j} \right)^{2} - 2 \cdot \frac{\left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0} \chi_{ij} \right)^{2}}{{}^{0}N} \\ &+ {}^{0}N \cdot \left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0} \chi_{ij} \right)^{2} \\ &= \sum_{i=1}^{m} \frac{\binom{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0}{\sum_{j=1}^{j} o_{k_{j}}} {}^{0}\chi_{j} \right)^{2}}{{}^{0}k_{i}} - \frac{\left(\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{o_{k_{1}, o_{k_{2}, \cdots, o_{k_{m}}}} 0} \chi_{ij} \right)^{2}}{{}^{0}N} = {}^{0}V_{A} \quad (6) \end{split}$$

(4)式より

$${}^{0}V_{I} = {}^{0}V_{T} - {}^{0}V_{A}$$
 (4)'

なので、(5)式から総変動 ${}^{\circ}V_{T}$ を、また(6)式から級間変動 ${}^{\circ}V_{A}$ をもとめて、その結果を(4)'式に代入すれば、級内変動 ${}^{\circ}V_{A}$ を得ることができる。

以上の数式にもとづいて実際に各種の変動を計測するには、表 2 から総変動 $^{\circ}V_{T}$ をもとめ、表 3 から級間変動 $^{\circ}V_{A}$ をもとめればよい。級内変動 $^{\circ}V_{I}$ は(4)' 式 $[^{\circ}V_{A}-^{\circ}V_{T}]$ によっ

てもとめることができる。

(3) 数值例

表 4 には、 4 つの階級のそれぞれが 5 個ず つの個体からなるときの、階級別個体データ が表章されている。

表4のデータは次の数値をあたえる。

$$^{\circ}V_{T}$$
=67873 $-\frac{1153^{2}}{20}$ =1402.55
[(5)式による(表 2 参照)]

$$^{\circ}V_{A}$$
=67305 $-\frac{1153^{2}}{20}$ =834.55
[(6)式による(表 3 参照)]

以上から,総変動 $^{\circ}V$ は 1402.55,級内変動 $^{\circ}V_{I}$ は 568.00,級間変動 $^{\circ}V_{A}$ は 834.55 である。したがって、これらの数値を

$${}^{0}V_{T} = {}^{0}V_{I} + {}^{0}V_{A}$$
 (4)[再掲]

に代入すれば、総変動は

1402.55 = 568.00 + 834.55

と分解される。

表 4 総変動の分解のための数値例

階級	階	級別	個体	デー	タ	階級別平均	階級別分散
1	60	65	69	73	75	68.4	29.44
2	51	53	55	59	62	56.0	16.00
3	48	49	53	60	65	55.0	42.80
4	46	47	50	53	60	51.2	25.36

(出所) 森博美「分散分析」,近昭夫・木村和範・森博 美編『演習 統計[改訂版]』産業統計研究社,1985 年,第15章,p.30にもとづく。ただし,表示の仕 方に手を加えた。

2. 総分散の分解

(1) 分解式

分散 σ^2 は,平均偏差二乗和(総変動)を偏差の個数で除して得られる。平均偏差の個数は階級内のデータ数 ${}^{\circ}k_i$ の総和 ${}^{\circ}N$ ($=\sum_{i=1}^{m}{}^{\circ}k_i$) に等しいから,基準時点の全データにかんする分散 (総分散) ${}^{\circ}\sigma_T{}^2$ は,総変動 ${}^{\circ}V_T$ を偏差の総個数 ${}^{\circ}N$ で除した

$${}^{0}\sigma_{T}{}^{2} = \frac{{}^{0}V_{T}}{{}^{0}N} \tag{7}$$

によってあたえられる。

この(7)式に、表4 があたえるデータの総個数 $^{\circ}N$ (=20) と $^{\circ}V_{T}$ (=1402.55) を代入すれば、総分散 $^{\circ}\sigma_{T}$ は

$$^{0}\sigma r^{2} = 70.1275$$

となる。

また、(4)式から総分散
$${}^{0}\sigma_{T}{}^{2} = \frac{{}^{0}V_{T}}{{}^{0}N}$$
 は、
$$\frac{{}^{0}V_{T}}{{}^{0}N} = \frac{{}^{0}V_{I} + {}^{0}V_{A}}{{}^{0}N} = \frac{{}^{0}V_{I}}{{}^{0}N} + \frac{{}^{0}V_{A}}{{}^{0}N}$$
(8)

と分解できる。上式の右辺第1項は総分散に たいする級内変動の寄与分を示し,第2項は 総分散にたいする級間変動の寄与分を示して いる。

(2) 数值例

(8)式に表 4 のデータにもとづいて上で算出された数値 (${}^{0}V_{I}$ と ${}^{0}V_{A}$, および ${}^{0}N$)を代入すれば、総分散 ${}^{0}\sigma_{T}{}^{2}$ は

$$70.1275 = 28.4000 + 41.7275$$

と分解される。ここから総分散 (70.1) にたいする級内変動の寄与分は 28.4 となり, これは総分散の 40.5%にあたる (寄与率 40.5%)。ま

た、級間変動の寄与分は41.7となり、これは 総分散の59.5%である(寄与率59.5%)。

3. 総変動の差の分解

(1) 分解式

基準時点を0, 比較時点をtとおく。そし て、時点が異なっていても、階級の個数(m)が不変であるとする(m=const.)。ただし、異 なった時点における各階級内の個体数 (k) が 必ずしも同一であるとは限らない。すなわち、 ${}^{0}k_{i}={}^{t}k_{i}$ となることは否定できないが、つね にこれが成立している保証はなく、 $^{0}k_{i}$ \neq $^{t}k_{i}$ となる可能性もある。また、総個数(N)につ いても同様に、 ${}^{\circ}N = {}^{t}N$ が成立する場合もあ るが、そうではなく、 ${}^{\circ}N \neq {}^{t}N$ となって、 ${}^{\circ}N < {}^{t}N$ となることもあれば、 ${}^{\circ}N > {}^{t}N$ とな ることもある。いずれにしても、基準時点と 比較時点の2時点における総変動とその分解 式は(3)式により次のようになる。

$$\begin{cases} \sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{k_{1},0}(\mathbf{e}_{X_{ij}}-\overline{\mathbf{e}_{X}})^{2} = \sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{q_{k_{1}},0}(\mathbf{e}_{X_{ij}}-\overline{\mathbf{e}_{X}})^{2} + \sum\limits_{i=1}^{m}\mathbf{e}_{k_{i}}(\overline{\mathbf{e}_{X_{i}}}-\overline{\mathbf{e}_{X}})^{2} \\ \sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{t_{k_{1}}/t_{k_{2}}-t_{k_{m}}}(t_{X_{ij}}-\overline{\mathbf{e}_{X}})^{2} = \sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{t_{k_{1}}/t_{k_{2}}-t_{k_{m}}}(t_{X_{ij}}-\overline{\mathbf{e}_{X}})^{2} + \sum\limits_{i=1}^{m}t_{k_{i}}(\overline{t_{X_{i}}}-\overline{t_{X}})^{2} \end{cases}$$

比較時点における総変動が基準時点と較べ てどれだけ増加(減少)したかを調べるには, 比較時点における総変動 ^tV_T から基準時点 における総変動 $^{\circ}V_{T}$ を引けばよい。すなわ ち, 次のようになる。

ここでは, 2時点間における総変動,級内

変動,級間変動にかんするそれぞれの差が,

$$\begin{cases} \Delta_T = {}^t V_T - {}^0 V_T \\ \Delta_I = {}^t V_I - {}^0 V_I \\ \Delta_A = {}^t V_A - {}^0 V_A \end{cases}$$

と表されている。

(2) 級間変動の差の分解

階級別のデータ数の変化が総変動の変化 Δ_{τ} にあたえる影響 (寄与分) を計測する目的 で、上のように分解された総変動の差にかん する(9)式右辺第2項(級間変動の差) ${}^{t}V_{A}-{}^{0}V_{A}$, t

$$\begin{split} \varDelta_{A} &= {}^{t}V_{A} - {}^{0}V_{A} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}(\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}(\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2} \end{split} \tag{10}$$

に着目する。

ここで.

$$\begin{cases} {}^{t}d_{i} = (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} \\ {}^{0}d_{i} = (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} \end{cases}$$
 (11)

とおき, (10)式に代入する。

$$\Delta_{A} = \sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}{}^{t}d_{i} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}{}^{0}d_{i}
= \sum_{i=1}^{m} ({}^{t}k_{i}{}^{t}d_{i} - {}^{0}k_{i}{}^{0}d_{i})$$
(12)

上式を整理するために次のようにおく。

$$\begin{cases} {}^tk_i = {}^0k_i + \varDelta^0k_i \\ {}^td_i = {}^0d_i + \varDelta^0d_i \end{cases}$$

$$\begin{aligned}
^{t}k_{i}^{t}d_{i} &= ^{0}k_{i}^{0}d_{i} \\
&= (^{0}k_{i} + \Delta^{0}k_{i})(^{0}d_{i} + \Delta^{0}d_{i}) - ^{0}k_{i}^{0}d_{i} \\
&= ^{0}k_{i}^{0}d_{i} + ^{0}k_{i}\Delta^{0}d_{i} + \Delta^{0}k_{i}^{0}d_{i} + \Delta^{0}k_{i}\Delta^{0}d_{i} - ^{0}k_{i}^{0}d_{i} \\
\end{aligned}$$

$$= {}^{0}k_{i} \varDelta^{0}d_{i} + \varDelta^{0}k_{i}{}^{0}d_{i} + \frac{1}{2} \varDelta^{0}k_{i} \varDelta^{0}d_{i} + \frac{1}{2} \varDelta^{0}k_{i} \varDelta^{0}d_{i}$$

$$= \varDelta^{0}d_{i} \Big({}^{0}k_{i} + \frac{1}{2} \varDelta^{0}k_{i} \Big) + \varDelta^{0}k_{i} \Big({}^{0}d_{i} + \frac{1}{2} \varDelta^{0}d_{i} \Big)$$

$$= ({}^{t}d_{i} - {}^{0}d_{i}) \Big({}^{0}k_{i} + \frac{1}{2} ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) \Big) + ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) \Big({}^{0}d_{i} + \frac{1}{2} ({}^{t}d_{i} - {}^{0}d_{i}) \Big)$$

$$= \Big\{ \Big({}^{t}x_{i} - \overline{{}^{t}x} \Big)^{2} - (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2} \Big\} \Big({}^{t}k_{i} + {}^{0}k_{i} \Big)$$

$$+ ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) \Big\{ \frac{(\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x})^{2} + (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x})^{2}}{2} \Big\}$$

$$(13)$$

(13)式を(12)式に代入すると(10)式は次のように 整理することができる³⁾。

$$\begin{split} & \varDelta_{A} \\ &= \sum_{i=1}^{m} \left[\left\{ (\overline{t_{X_{i}}} - \overline{t_{X}})^{2} - (\overline{0_{X_{i}}} - \overline{0_{X}})^{2} \right\} \left(\frac{t_{k_{i}} + 0_{k_{i}}}{2} \right) \\ & + (t_{k_{i}} - 0_{k_{i}}) \left\{ \frac{(\overline{t_{X_{i}}} - \overline{t_{X}})^{2} + (\overline{0_{X_{i}}} - \overline{0_{X}})^{2}}{2} \right\} \right] \\ &= \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t_{X_{i}}} - \overline{\overline{t_{X}}})^{2} - (\overline{0_{X_{i}}} - \overline{0_{X}})^{2} \right\} \left(\frac{t_{k_{i}} + 0_{k_{i}}}{2} \right) \\ & + \sum_{i=1}^{m} (t_{k_{i}} - 0_{k_{i}}) \left\{ \frac{(\overline{t_{X_{i}}} - \overline{t_{X}})^{2} + (\overline{0_{X_{i}}} - \overline{0_{X}})^{2}}{2} \right\} \end{split}$$

$$(14)$$

(14)式の数学的含意を理解するために,同式 右辺の各項を

$$\begin{cases} \Delta_{A}' = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2} - (\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2} \right\} \left(\frac{t}{2}k_{i} + \overline{t}k_{i} \right) \\ \Delta_{A}'' = \sum_{i=1}^{m} (tk_{i} - \overline{t}k_{i}) \left\{ \frac{(\overline{t}x_{i}}{2} - \overline{t}x)^{2} + (\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2}}{2} \right\} \end{cases}$$

とおく。

ここで、いずれの階級においてもそれを構成する個体数が異時点間で変化しない $({}^{t}k_{i} = {}^{0}k_{i})$ と仮定すれば、すなわち、

$${}^{t}k_{i}-{}^{0}k_{i}=0$$

であれば,

$$\begin{cases} \varDelta_{A}' = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} - (\overline{{}^{0}}x_{i} - \overline{{}^{0}}\overline{x})^{2} \right\} \left(\frac{tk_{i} + 0k_{i}}{2} \right) \\ = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} - (\overline{{}^{0}}x_{i} - \overline{{}^{0}}\overline{x})^{2} \right\} \frac{2 \cdot {}^{0}k_{i}}{2} \\ = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} - (\overline{{}^{0}}x_{i} - \overline{{}^{0}}\overline{x})^{2} \right\} \cdot {}^{0}k_{i} \\ \varDelta_{A}'' = 0 \qquad \qquad (\because tk_{i} - {}^{0}k_{i} = 0) \\ \therefore \quad \varDelta_{A} = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t}x_{i} - \overline{t}\overline{x})^{2} - (\overline{{}^{0}}x_{i} - \overline{{}^{0}}\overline{x})^{2} \right\} \cdot {}^{0}k_{i} \\ = \varDelta_{A}' \end{cases}$$

となる。このことから分ることは、すべての階級において時点間で階級内個体数に変化がない場合、階級ごとの級間変動の変化 Δ_A が、基準時点の階級内個体数をウェイトとして、級間変動の変化 Δ_A を規定するということである。

他方で、いずれの階級においても時点間で 級間変動に変化がない $((\frac{t}{x_i} - \frac{\overline{t}x})^2 = (\frac{\overline{x}_i}{x_i} - \frac{\overline{x}}{x_i})^2)$ とすれば、すなわち

$$(\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{\overline{x}})^2 - (\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{\overline{x}})^2 = 0$$

であれば,

$$\begin{cases} \Delta_{A}' = 0 & (\because (\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2} - (\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2} = 0) \\ \Delta_{A}'' = \sum_{i=1}^{m} ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) \left\{ \frac{(\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2} + (\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2}}{2} \right\} \\ = \sum_{i=1}^{m} ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) \left\{ \frac{2(\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2}}{2} \right\} \\ & (\because (\overline{t}x_{i} - \overline{t}x)^{2} = (\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2}) \\ = \sum_{i=1}^{m} ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) (\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2} \\ \therefore \quad \Delta_{A} = \sum_{i=1}^{m} ({}^{t}k_{i} - {}^{0}k_{i}) (\overline{0}x_{i} - \overline{0}x)^{2} \\ = \Delta_{A}'' \end{cases}$$

となる。このことは、すべての階級において 時点間で級間変動に変化がない場合、階級内 個体数の変化 Δ_A " が、基準時点における階級 ごとの級間変動をウェイトとして、級間変動 の変化 Δ_A を規定することを意味する。

このように、総変動の差にかんする(9)式右

 ³⁾ ①関彌三郎『寄与度・寄与率 ― 増加率の寄与度分解法 ― 』産業統計研究社,1992年,p.179;
 ②木村和範『ジニ係数の形成』北海道大学出版会,2008年,p.317f.。

辺第 2 項 (級間変動の差) ${}^tV_A - {}^0V_A$ に着目し、それを分解すると、級間変動の差 \varDelta_A は、①階級内の個体数が一定不変であることを前提したときに、さまざまな級間変動の変化が果たす寄与分 \varDelta_A と②すべての階級において時点間で級間変動がなく、一定不変であると前提したときに、階級内個体数の変化が果たす寄与分 \varDelta_A に分解されることが分かる。

以上の結果,総変動の異時点間変化 Δ_T は次のように分解される。

- ①級内変動の異時点間変化 △1
- ②級間変動の異時点間変化 AA
- ③階級内個体数の異時点間変化 Да"

換言すれば、総変動を級内変動と級間変動に分解し、異時点間で比較するときには、それぞれの変動別(級内変動と級間変動)の変化を検出するにすぎないが、総変動の差 Δ_T をとることによって、

$$\Delta_T$$

$$= \Delta_I + \Delta_A$$

$$= \Delta_I + \Delta_A' + \Delta_A'' \tag{15}$$

と分解され、総変動の差 Δ_T にたいして果たす①級内変動の異時点間変化の寄与分 Δ_I 、②級間変動の異時点間変化の寄与分 Δ_A の 2 つだけでなく、③階級内個体数の異時点間変化の寄与分 Δ_A も計測できるようになる。すなわち、

$$\Delta_A = {}^t V_A - {}^0 V_A \tag{10} [再掲]$$

から(14)式を誘導することによって、級間変動

総変動
$$\Delta_r$$
 の変化 Δ_r 広義の級間変動 Δ_A (狭義の級間変動 Δ_A) 個 体 数 変 動 Δ_A "

図1 総変動の変化とその要因

 Δ_A は, Δ_A と Δ_A の 2 つに分解される。本稿では分解前の級間変動 Δ_A を広義の級間変動と名づけ,分解後の級間変動 Δ_A を狭義の級間変動と名づけることにする(図 1 参照)。

こうして,(9)式と(14)式により,(15)式は次のように分解することができる。

$$\begin{split} & {}^{t}V_{T} - {}^{0}V_{T} = \mathcal{L}_{T} \\ & = \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{L_{i}}t_{k_{2},\cdots,t}k_{m}} ({}^{t}x_{ij} - \overline{tx})^{2} - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_{L_{i}}0k_{2},\cdots,0k_{m}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{0x})^{2} \\ & = \left\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{L_{i}}t_{k_{2},\cdots,t}k_{m}} ({}^{t}x_{ij} - \overline{tx}_{i})^{2} - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_{L_{i}}0k_{2},\cdots,0k_{m}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{0x}_{i})^{2} \right\} \\ & + \left\{ \sum_{i=1}^{m} t_{k_{i}} (\overline{tx}_{i} - \overline{tx})^{2} - \sum_{i=1}^{m} 0k_{i} (\overline{0x}_{i} - \overline{0x})^{2} \right\} \\ & = \left\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{L_{i}}t_{k_{i}}} ({}^{t}x_{ij} - \overline{tx}_{i})^{2} - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_{L_{i}}0k_{2},\cdots,0k_{m}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{0x})^{2} \right\} \\ & + \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{tx}_{i} - \overline{tx})^{2} - (\overline{0x}_{i} - \overline{0x})^{2} \right\} \left(\frac{t_{k_{i}} + 0k_{i}}{2} \right) \\ & + \sum_{i=1}^{m} (t_{k_{i}} - 0k_{i}) \left\{ \frac{(\overline{tx}_{i} - \overline{tx})^{2} + (\overline{0x}_{i} - \overline{0x})^{2}}{2} \right\} \end{split}$$
 (16)

ところで、総変動は個体データの総数によっても変動する。この総個数の違いが果たす数値集団の変動効果を除去するために考案されたのが、分散である。これは、偏差1つあたりの変動を計測する尺度である。これによって、構成する個体の総数を異にする諸集団を統一的に比較することができる。そこで、異時点間の総変動の差を統一的基準(分散)で比較するために、次に項を改めて総分散の差がどのように分解されるかを考察する。

4. 総分散の差の分解

(1) 分解式

基準時点を0 で表し,そのときのデータの総個数を $^{\circ}N$ とおく。また,比較時点を t で表し,そのときのデータの総個数を ^{t}N とおく。さらに,基準時点における総分散を $^{\circ}\sigma^{2}$,比較時点における総分散を $^{t}\sigma^{2}$ とおく。総分散は,

総変動(平均偏差二乗和)を偏差の個数で除した統計量であるから、比較時点の総分散と基準時点の総分散は次のようになる。

$$\begin{cases}
{}^{t}\sigma^{2} = \frac{{}^{t}V_{T}}{{}^{t}N} \\
{}^{0}\sigma^{2} = \frac{{}^{0}V_{T}}{{}^{0}N}
\end{cases}$$
(17)

すでに述べたように、総変動 V_T は級内変動 V_I と級間変動 V_A に分解されるので、(I7)式は

$$\begin{cases} {}^{t}\sigma^{2} = \frac{{}^{t}V_{I} + {}^{t}V_{A}}{{}^{t}N} = \frac{{}^{t}V_{I}}{{}^{t}N} + \frac{{}^{t}V_{A}}{{}^{t}N} \\ {}^{0}\sigma^{2} = \frac{{}^{0}V_{I} + {}^{0}V_{A}}{{}^{0}N} = \frac{{}^{0}V_{I}}{{}^{0}N} + \frac{{}^{0}V_{A}}{{}^{0}N} \end{cases}$$
(17)

になる。

2 時点間における総分散の差を $\Delta \sigma^2$ とおくと、それは次のようになる ((9)式、 $(\Pi)'$ 式参照)。

$$\begin{split} & \varDelta\sigma^{2} = {}^{t}\sigma^{2} - {}^{0}\sigma^{2} \\ & = \left(\frac{{}^{t}V_{I}}{{}^{t}N} + \frac{{}^{t}V_{A}}{{}^{t}N}\right) - \left(\frac{{}^{0}V_{I}}{{}^{0}N} + \frac{{}^{0}V_{A}}{{}^{0}N}\right) \\ & = \left(\frac{{}^{t}V_{I}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}V_{I}}{{}^{0}N}\right) + \left(\frac{{}^{t}V_{A}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}V_{A}}{{}^{0}N}\right) \\ & = \left\{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} ({}^{t}x_{i,i}, {}^{t}x_{i,j}, -{}^{t}x_{i,j})^{2} - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} \sum_{j=1}^{n} ({}^{0}x_{i,j}, -{}^{0}x_{i,j})^{2} \right\} \\ & + \left\{\sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}, ({}^{t}x_{i}, -\overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}, ({}^{0}x_{i}, -\overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \right\} \\ & = \left\{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{m} ({}^{t}x_{i,i}, {}^{t}x_{i,j}, -{}^{t}x_{i,j})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}, ({}^{0}x_{i}, -\overline{{}^{0}x_{i,j}})^{2} \right\} \\ & + \left\{\sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}, ({}^{t}x_{i}, -\overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}, ({}^{0}x_{i}, -\overline{{}^{0}x_{i,j}})^{2} \right\} \\ & + \left\{\sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}, ({}^{t}x_{i}, -\overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}, ({}^{0}x_{i}, -\overline{{}^{0}x_{i,j}})^{2} \right\} \end{split}$$
 (18)

ここで,

$$\lambda_i = \frac{k_i}{N}$$

とおくと、上式は次のようになる。

$$\Delta\sigma^{2} = \left\{ \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{t_{k_{1},k_{2},\cdots,t_{k_{m}}}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^{2}}{t_{N}} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{t_{k_{1},0}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^{2}}{t_{N}} \right\} + \left\{ \sum_{i=1}^{m} t_{\lambda_{i}} (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^{2} - \sum_{i=1}^{m} t_{\lambda_{i}} (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^{2} \right\} \tag{18}$$

ところが, (18) 式右辺における

$$\sum_{i=1}^{m} {}^{t} \lambda_{i} (\overline{{}^{t} \chi_{i}} - \overline{{}^{t} \chi})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0} \lambda_{i} (\overline{{}^{0} \chi_{i}} - \overline{{}^{0} \chi})^{2}$$

は,

$$\begin{split} & \varDelta_{A} \\ &= {}^{t} V_{A} - {}^{0} V_{A} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{t} k_{i} (\overline{{}^{t} x_{i}} - \overline{{}^{t} x})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0} k_{i} (\overline{{}^{0} x_{i}} - \overline{{}^{0} x})^{2} \text{ [II]} \\ &= \sum_{i=1}^{m} {}^{t} k_{i} (\overline{{}^{t} x_{i}} - \overline{{}^{t} x})^{2} - \sum_{i=1}^{m} {}^{0} k_{i} (\overline{{}^{0} x_{i}} - \overline{{}^{0} x})^{2} \text{ [III]} \end{split}$$

と形式的に同一である。そこで,(10)式から(14)式を誘導した手順を準用して,(18)式右辺の第 3 項と第 4 項を整理し,その結果を(18)、式に代入すれば, $2\sigma^2$ は次のようになる。

$$\begin{split} \mathcal{\Delta}\sigma^2 = & \left\{ \frac{\sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{k_1,k_2,-i_k m} (^t\chi_{ij} - \overline{t_{\chi_i}})^2}{^tN} - \sum\limits_{i=1}^{m}\sum\limits_{j=1}^{0k_1,^k}\sum\limits_{j=1}^{N_2,-i_k m} (^0\chi_{ij} - \overline{u_{\chi_i}})^2}{^0N} \right\} \\ & + \sum\limits_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi}})^2 - (^0\chi_i - \overline{u_{\chi}})^2) \left(\frac{^t\lambda_i + ^0\lambda_i}{2} \right) \\ & + \sum\limits_{i=1}^{m} (^t\lambda_i - ^0\lambda_i) \left\{ \frac{(^t\chi_i - \overline{t_{\chi}})^2 + (^0\chi_i - \overline{u_{\chi}})^2}{2} \right\} \end{split}$$

①総分散の変動にたいする級内変動の変化の寄与分

$$= \left\{ \sum_{i=1}^{\frac{m}{i}} \sum_{j=1}^{k_{1,i}k_{2,i}\cdots i,k_{m}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^{2} - \sum_{i=1}^{\frac{m}{i}} \sum_{j=1}^{N_{1,0}k_{2,i}\cdots 0,k_{m}} (0\chi_{ij} - \overline{0\chi_{i}})^{2} \right\}$$

②総分散の変動にたいする級間変動の変化の寄与分

$$+\sum_{i=1}^{m}\biggl\{(\overline{{}^{t}\!x_{i}}-\overline{{}^{t}\!\overline{x}})^{2}-(\overline{{}^{0}\!x_{i}}-\overline{{}^{0}\!\overline{x}})^{2}\biggr\}\biggl(\frac{{}^{t}\!\underline{k_{i}}}{{}^{t}\!N}+\frac{{}^{0}\!\underline{k_{i}}}{{}^{0}\!N}\biggr)$$

③総分散の変動にたいする階級内個体占有率の変化の寄与分

$$+\sum_{i=1}^{m} \left(\frac{tk_i}{tN} - \frac{{}^{0}k_i}{{}^{0}N}\right) \left\{\frac{(\overline{t}\chi_i}{2} - \overline{\overline{t\chi}})^2 + (\overline{0}\chi_i - \overline{0}\overline{\chi})^2}{2}\right\}$$
(19)

(17)式により、総分散の差 $\Delta \sigma^2$ は次のようになる。

$$\Delta \sigma^2 = \frac{{}^tV_T}{{}^tN} - \frac{{}^0V_T}{{}^0N} \tag{20}$$

表5 (19)式右辺第2項・第3項のための計算表

5間変動	(19)式右辺第3項 (構造的変化)	9	9ש	$\left(\frac{(k_{\mathrm{L}}-\frac{o_{k_{\mathrm{L}}}}{N})\left\{\frac{(x_{\mathrm{L}}-\overline{x})^{2}+(o_{\mathrm{L}}-\overline{o}_{\mathrm{L}})^{2}}{2}\right\}}{2}\right)$	$\left(\frac{i k_0}{i N} - \frac{v_{k_0}}{v_N}\right) \left(\frac{(\overline{i_0} - \overline{i_0})^2 + (\overline{v_0} - \overline{v_0})^2}{2}\right)$	 $\left\{\binom{i_{R_i}}{i_N} - \binom{i_{R_i}}{0}N\right\}\left(\frac{(\overline{x_i} - \overline{x_i})^2 + (\widetilde{0}\overline{x_i} - \overline{0}\overline{X})^2}{2}\right\}$	 $\left\{\frac{i\hbar_{\rm m}}{i} - \frac{9}{6N}\right\} \left\{ \frac{(i_{\rm m} - \overline{i}_{\rm m})^2 + (9_{\rm m} - \overline{0}_{\rm m})^2}{2} \right\}$	$\sum_{i=1}^{n} \binom{R_{i}}{iN} - \frac{0}{0} \frac{N}{N} \left\{ (\frac{i}{2N} - \overline{N})^2 + (\overline{0}_{N} - \overline{0}_{N})^2 \right\}$
広義の級間変動	(19式右辺第2項 (狭義の級間変動)	6	®×@	$\left\{ (\overline{x_i} - \overline{x})^2 - (\overline{a_i} - \overline{a_i})^2 \right\} \left(\frac{ik_i}{iN} + \frac{ok_i}{2N} \right)$	$\left\{\left(\widetilde{x_k}-\widetilde{x}\right)^2-\left(\widetilde{v_k}-\widetilde{v_k}\right)^2\left(\frac{k_k}{N}+\frac{v_{k_k}}{2}\right)\left(\frac{k_k}{N}-\frac{v_k}{v_N}\right)\left(\frac{(\widetilde{x_0}-\widetilde{x})^2+(\widetilde{v_{20}}-\widetilde{v_N})^2}{2}\right)\right\}$	 $\frac{t_{k_1}}{2N} + \frac{\circ b_{k_1}}{2N} \left\{ (\overline{z_k} - \overline{z_k})^2 - (\overline{z_k} - \overline{z_k})^2 \right\} \left(\frac{t_{k_1}}{2N} + \frac{\circ b_{k_1}}{2N} \right)$	 $\left(\frac{(\widetilde{x_n}-\widetilde{x_n})^2-(\widetilde{o}_{\overline{x_n}}-\widetilde{o}_{\overline{x_n}})^2}{2}\right)\left(\frac{k_n}{N}+\frac{\delta_{k_n}}{2}\right)\left(\frac{k_n}{N}-\frac{\delta_{k_n}}{N}\right)\left(\frac{(\widetilde{x_n}-\widetilde{x_n})^2+(\widetilde{o}_{\overline{x_n}}-\widetilde{o}_{\overline{x_n}})^2}{2}\right)$	$\sum_{i=1}^{n} \left\{ (\overline{x_i} - \overline{x_i})^2 - (\overline{y_i} - \overline{x_i})^2 \right\} \left(\frac{\theta_{i_i}}{2N} + \frac{\theta_{i_i}}{9N} \right)$
		8	3+4	$\frac{{}^tk_{\rm l}}{{}^tN} + \frac{{}^0k_{\rm l}}{{}^0N}$	$\frac{{}^tk_2}{{}^tN} + \frac{{}^0k_2}{{}^0N}$		 $\frac{{}^tk_m}{{}^tN} + \frac{{}^0k_m}{{}^0N}$	
		(L)	3-4	$\frac{N_0}{N_t} - \frac{N_t}{N_t}$	$\frac{t k_2}{t N^4} - \frac{0 k_2}{0 N^4}$	 $\frac{{}^t\!k_i}{{}^t\!N} - \frac{{}^0\!k_i}{{}^0\!N}$	 $\frac{N_0}{M_0} - \frac{N_t}{M_t}$	
		9	(1) + (2) (2) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	$\frac{(^{7}N_{1}-\overline{^{1}})^{2}+(^{0}N_{1}-\overline{^{0}}X)^{2}}{2}$	$(\overline{\lambda_0} - \overline{\lambda})^2 - (\overline{\lambda_0} - \overline{\lambda})^2 = (\overline{\lambda_0} - \overline{\lambda})^2 + (\overline{\lambda_0} - \overline{\lambda})^2$	 $(\overline{x_t} - \overline{x})^2 - (\overline{a_x} - \overline{a_y})^2$	 $(\frac{z_{\rm ee} - \overline{z_{\rm e}}}{2})^2 - (\frac{z_{\rm ee} - \overline{z_{\rm ee}}}{2})^2 - (\frac{z_{\rm ee} - \overline{z_{\rm ee}}}{2})^2 - (\frac{z_{\rm ee} - \overline{z_{\rm ee}}}{2})^2 - \frac{t_{\rm fee}}{2}$	
		9	(I) - (2)	$(\overline{x_0} - \overline{x_0})^2 - (\overline{x_1} - \overline{x_1})$	$(\overline{\lambda_2} - \overline{\lambda})^2 - (\overline{0\lambda_2} - \overline{0\lambda})^2$	 $(\overline{X_i} - \overline{X_j})^2 - (\overline{0X_i} - \overline{0X_j})^2$	 $z(\overline{x_0} - \overline{x_0}) - z(\overline{x_2} - \overline{x_2})$	
	料	推	₩ 🗇	$\frac{{}^0k_1}{{}^0N}$	$\frac{{}^0k_2}{{}^0N}$	 ${}^{_{0}}k_{i}_{_{\overline{0}}}$	 $^{0}k_{m}^{0}$	
	個体比率	光蒙.	性 💿	$\frac{{}^t\! k_1}{{}^t\! N}$	$\frac{{}^t\! k_2}{{}^t\! N}$	 $\frac{{}^t\! k_i}{{}^t\! N}$	 $\frac{{}^{t}k_{m}}{{}^{t}N}$	•
	$(x_i - \overline{x})^2$	基準時点	@	$(\overline{\overline{x_1}} - \overline{\overline{x_2}})^2$	$(\overline{0_{\lambda 2}} - \overline{0_{\lambda}})^2$	 $(\overline{\underline{x_i}} - \overline{\underline{x_j}})^2$	 $-\overline{\overline{(x_m-\overline{0_X})^2}}$ $(\overline{0_{X_m}-\overline{0_X})^2}$	
	$(x_i -$	比較時点	Θ	$({}^tx_1 - \overline{{}^tx})^2$	$(\sqrt{x_2} - \overline{\sqrt{x_1}})^2$	 $z(\overline{x_i} - \overline{x_j})$	 $(\overline{\frac{x}{x_m}} - \overline{\frac{x}{x}})^2$	
	個数	基準時点		$^{0}k_{1}$	$^{0}k_{2}$	 $^{\circ}k_{i}$	 $^{0}k_{m}$	$^{t}N = \sum_{i=1}^{m} {}^{t}k_{i}$ $^{0}N = \sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{i}$
	即	比較時点		$^{t}k_{1}$	$^{t}k_{2}$	 $^{\iota}k_{\iota}$	 $^{t}k_{m}$	$^tN = \sum_{i=1}^m {}^tk_i$
	平 を	無	世	1x ₀	0.322	 x_i	 ux_0	
	階級別平均	光較.	世	, x	27,	 x_i	 $^{t}\chi_{m}$	如
	à	陌袋		-1	2	 i	 ш	

備考	表2参照
推準時点	$\sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{1}{}^{0}k_{2}\cdots {}^{0}k_{m}$ $=\sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{1}{}^{0}k_{2}\cdots {}^{0}k_{i}$ $=\sum_{i=1}^{m} {}^{0}k_{1}{}^{0}k_{2}\cdots {}^{0}k_{i}$
比較時点	$\sum_{i=1}^{m} \sum_{\substack{i,k_1,k_2,\dots,k_m \\ i=1}} \sum_{j=1}^{m} \sum_{\substack{i=1 \\ j=1}} \sum_{j=1}^{m} \sum_{\substack{i,k_1,k_2,\dots,k_m \\ j=1}} x_{i,j}$
	合計 平均

表 6 級間分散の差にかんする分解式のための検算表

	備考 (①~④は表 5 に対応)					広義の級間変動 (18 式参照)。ただし、 (18) 式の λ は k/N 。	分解後の級間変動 (似式参照)。表 5 の⑨欄と⑩欄の合計。
女女 の 一般にしていました タング・ア・ア・ア・ア・ア・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・	分解前の級間分散(UB式第2項) (B) (ID-(ID)	$rac{^tk_{ m i}}{^tN}(rac{^tk_{ m i}}{^tN}-rac{^tk_{ m i}}{^tN})^2-rac{^0k_{ m i}}{^0N}(rac{^0k_{ m i}}{^tN}-rac{^0K}{^0N})^2$	$rac{^tk_2^2}{^tN}(rac{^tk_2}{^t}-rac{^tx}{^t})^2-rac{^0k_2^2}{^0N}(rac{^0k_2}{^t}-rac{^0x}{^t})^2$	 $rac{^t k_{t_i}}{^t N} (^t x_t - \overline{^t x})^2 - rac{^0 k_{t_i}}{^0 N} (^0 x_t - \overline{^0 x})^2$	 $rac{^tk_m}{^tN}(^tx_m - \overline{^tx})^2 - rac{^0k_m}{^0N}(^{\overline{0}x_m} - \overline{^0x})^2$	$\sum_{i=1}^{m} \frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} \left(\frac{(x_{i} - \overline{t_{X}})^{2}}{-\overline{t_{x}}} \right)^{2} - \sum_{i=1}^{m} \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N} \left(\overline{o_{X_{i}}} - \overline{o_{X}} \right)^{2}$	$\sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{x_i} - \overline{t_X})^2 - (\overline{0x_i} - \overline{0x})^2 \right\} \left(\frac{{}^tk_i}{tN} + \frac{{}^0k_i}{2N} \right) + \sum_{i=1}^{m} \left(\frac{{}^tk_i}{tN} - \frac{{}^0k_i}{0N} \right) \left\{ (\overline{tx_i} - \overline{t_X})^2 + (\overline{0x_i} - \overline{0x})^2 \right\} $
	基準時点 (I) (A)×(2)	$rac{{}^0 k_{ m l}}{{}^0 N} (rac{{}^0 x_{ m l}}{{}^0 x_{ m l}} - \overline{rac{{}^0 x}{{}^0}})^2$	$\frac{^0k_2^{}}{^0N}(\overline{^0x_2}-\overline{^0x})^2$	 $rac{{}^0k_i}{{}^0N}(\overline{{}^0x_i}-\overline{{}^0x})^2$	 $\frac{{}^0k_m}{{}^0N}\left(\overline{{}^0x_m}-\overline{\overline{{}^0x}}\right)^2$	$\sum_{i=1}^m \frac{{}^0k_i}{{}^0N} (\overline{{}^0\chi_i} - \overline{\overline{{}^0\chi}})^2$	
	比較時点 (I) (3)×(I)	$\frac{{}^t\!k_{\!\scriptscriptstyle \perp}}{{}^t\!N}(\overline{{}^t\!x_{\!\scriptscriptstyle \parallel}}-\overline{{}^t\!x_{\!\scriptscriptstyle \parallel}})^2$	$\frac{1}{t} \frac{k_2}{N} \left(\frac{1}{N_2} - \frac{1}{N_2} \right)^2$	 $(\frac{tk_i}{tN})^2$	 $\frac{{}^{t}k_{m}}{{}^{t}N}\left({}^{t}\mathfrak{X}_{m}-\overline{{}^{t}\mathfrak{X}}\right)^{2}$	$\sum_{i=1}^{m} \frac{^{t}k_{i}}{^{t}N} \left(\frac{^{t}x_{i}}{^{t}X_{i}} - \frac{^{t}x}{^{t}X} \right)^{2} \left \sum_{i=1}^{m} \frac{^{0}k_{i}}{^{0}N} \left(\frac{^{0}x_{i}}{^{0}X_{i}} - \overline{^{0}X} \right)^{2} \right $	参
	階級	П	2	 i	 ш	₹	

 $\left| + \sum_{i=1}^{m} \binom{i k_i}{i N} - \frac{{}^0 k_i}{{}^0 N} \right| \left\{ \frac{(\overline{i x_i} - \overline{i x})^2 + (\overline{0 x_i} - \overline{0 x})^2}{2} \right|$ 検算は $\sum_{i=1}^{m} \frac{t k_i}{t N} \left(\frac{t_N - \overline{t_N}}{t_N} \right)^2 - \sum_{i=1}^{m} \frac{0 k_i}{0 N} \left(\frac{0_{N_i} - \overline{0_N}}{0_N} \right)^2 = \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\frac{t_N}{t_N} - \overline{t_N})^2 - (\frac{0_{N_i} - \overline{0_N}}{0_N})^2 \right\} \left\{ \frac{t k_i}{t N} + \frac{0 k_i}{0 N} \right\}$

この(20)式の V_T は、すでに誘導した簡便式 ((5)式)によってもとめることができる (表 2 参照)。

他方で,(19)式右辺の①は

$$\frac{{}^tV_I}{{}^tN} - \frac{{}^0V_I}{{}^0N}$$

である。上式の V_I は,(5)式でもとめた V_T (表 2 参照)と(6)式でもとめた V_A (表 3 参照)に よって 算 出 す る こ と が で き る((4)'式 $[V_I = V_T - V_A]$ 参照)。また, tN と oN はそれ ぞれ,比較時点と基準時点におけるデータの 総数である。

以上により、(19)式右辺の①(総分散の変動に たいする級内変動の変化の寄与分)をもとめる ことができる。そして、(19)式右辺の②と③は、 表5(前々頁)を作成すれば、もとめることが できる。また、その検算には表6(前頁)を用 いればよい。

(2) 寄与率

(18)式でもとめた $\Delta\sigma^2$ で、(19)式右辺が示すそれぞれの寄与分を割れば、①総分散の変動にたいする級内変動の変化の寄与率、②総分散の変動にたいする(狭義の)級間変動の変化の寄与率、③総分散の変動にたいする階級内個体占有率の変化(構造的変化)の寄与率を、次のように計算することができる。

$$\frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{1,i}k_{2,i}...,k_{m}} ({}^{t}x_{ij} - \overline{{}^{t}x_{i}})^{2}}{{}^{t}N} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{1,i}k_{2,i}...,k_{m}} ({}^{0}x_{ij} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2}}{{}^{0}N} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \right\} \left(\frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} + \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N} \right)}{2} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \right\} \left(\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x_{i}})^{2} + (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2}}{2} \right)}{2} - \frac{\sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{{}^{t}k_{i}} - \frac{{}^{0}k_{i}}{N}) \left\{ (\overline{{}^{t}x_{i}} - \overline{{}^{t}x_{i}})^{2} + (\overline{{}^{0}x_{i}} - \overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \right\} - \frac{1}{2} \right\}}{2} - \frac{1}{2} - \frac{1$$

表 7 ケース I — 比較時点のデータ(その 1) —

階級	階	級別	個体	デー	タ	階級別平均	階級別分散
1	60	65	69	73	75	68.4	29.44
2	51	53	55	59	62	56.0	16.00
2	51	53	55	59	62	00.0	10.00
3	48	49	53	60	65	55.0	42.80
4	20	30	40	50	60	40.0	200.00

表 8 ケース II — 比較時点のデータ(その 2) —

階級	階	級別	個体	デー	タ	階級別平均	階級別分散
1	60	65	69	73	75	68.4	29.44
2	51	53	55	59	62	56.0	16.00
3	48	49	53	60	65	55.0	42.80
4	20	30	40	50	60	40.0	200.00
4	20	30	40	50	60	40.0	200.00

(3) 数值例

表 4 に表章したデータの組を基準時点のデータと見なす。そして,比較時点のデータとしてケース I (表 7) とケース I (表 8) の 2 つを取り上げ,これまで述べてきた要因分解法の特質を具体例によって示す。

ケース I では、第 2 階級に落ちるデータの個数が 10 個となって、基準時点のデータの 2 倍になっている(同一の値が 2 個ずつある)こと、ならびに第 4 階級における 5 個の個体の数量的規定性が異なり、階級別の平均と分散が変化していることが確認できる。その他の2つの階級(第 1 階級と第 3 階級)において平均・分散に変化はない(第 2 階級も平均・分散は 2 時点間で同じである)。

ケースIIでは、第1階級から第3階級までは基準時点と同様であるが、第4階級だけがその階級に落ちる個体の個数とその数量的規定性が基準時点とは異なり、そのために、こ

表 9 数値例にかんするさまざまな統計量

	比較	時点	基準時点
	ケース I (表 7)	ケースII(表8)	(表 4)
総平均 $\overline{^{o}x}$	55.08	51.88	57.65
総個数 N	25	25	20
総変動 V_T	3,553.84	5,350.64	1,402.55
級内変動 V_I	1,521.20	2,441.20	568.00
級間変動 V_A	2,032.64	2,909.44	834.55
総変動/総個数 V_T/N , [総分散 σ^2]	142.1536	214.0256	70.1275
級内変動/総個数 V_I/N	60.8480	97.6480	28.4000
級間変動/総個数 V_A/N	81.3056	116.3776	41.7275
(参考値) 総標準偏差 σ	11.9228	14.6296	8.3742

表 10 2 時点間における差

	比較時点-基準時点				
	ケース I		ケースII		
総分散 $\Delta V_T/N$, $[\Delta \sigma^2]$	72.0261		143.8981		
級内変動 $\Delta V_I/N$		32.4480 (45.1%)		69.2480 (48.1%)	
広義の級間変動 ΔV4/N	狭義の級間変動	39.5781	53.5360 (74.3%)	74.6501	71.5680 (49.7%)
広義の級間変動 $\Delta V_A/N$	構造的変化	(54.9%)	-13.9579 $(-19.4%)$	(51.9%)	3.0821 (2.1%)

(注記) () 内数字は、総分散の差にたいする寄与率(%)。ケースⅡにおける寄与率では計算上の誤差が生ずる。

の階級の平均・分散が基準時点の値とは異なっている。しかし、いずれのケースでも、 総個数が 20 から 25 へと増加していることは 共通している。

これらのデータについて、これまでに述べてきた計算式を適用すれば、さまざまな統計量の値が上のように得られる(表9)。

また、2時点間における総分散の差については上のようになる(表10)。

個体数が基準時点の5から比較時点の10へと2倍に増加した階級が1つだけある点がケースIとIIに共通しているにもかかわらず,表10から,構造的変化の寄与分は2つのケースで等しくないことが分かる。以下では,

このことを考察する。

ケース I では構造的変化の寄与分が総分散の差を減少させるのにたいして,ケース II では構造的変化が微小ながら総分散の差を増加させている。しかし,この表 10 からだけでは,総分散の変化をもたらした階級がどれであるかは分からない。表 10 から分かることは,ケース I では総体として構造的変化が総分散の差を引き下げる作用をなしたということだけである。

このことは、表 10 における①級内変動、② 狭義の級間変動、③構造的変化の、それぞれ の寄与を数値的に特定する次式

$$\Delta \sigma^2 = \underbrace{\left\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{1,i} k_{1,i} - ik_{m}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2 - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{N_{1,i}} \sum_{j=1}^{N_{1,i}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2 \right\}}_{N}$$

$$+ \sum_{i=1}^{m} \{ (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi}})^2 - (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2 \} \left(\frac{t_{\chi_{i}}}{t_{N}} + \frac{0k_{i}}{0N} \right)$$

$$+ \sum_{i=1}^{m} \left(\frac{t_{k_{i}}}{t_{N}} - \frac{0k_{i}}{0N} \right) \left\{ \frac{(\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi}})^2 + (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2}{2} \right\}$$

$$+ \sum_{i=1}^{m} \left(\frac{t_{k_{i}}}{t_{N}} - \frac{0k_{i}}{0N} \right) \left\{ \frac{(\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2 + (\overline{t_{\chi_{i}}} - \overline{t_{\chi_{i}}})^2}{2} \right\}$$

$$(19) [$$

$$(19) [$$

から明らかである。(19)式は、それぞれの寄与 分が、階級ごとに計算される関連数値の和と してあたえられることを示している。①級内 変動はともかくとして、②狭義の級間変動の 寄与については

$$(\overline{t}_{\chi_i} - \overline{t}_{\chi})^2 - (\overline{t}_{\chi_i} - \overline{t}_{\chi})^2$$

が負数となる階級の存在が,その寄与分を押 し下げる。また,③構造的変化の寄与につい ては

$$\frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N}$$

の値が負数になる階級の存在は、それだけこ の寄与分を小さくする。

以下では、このことを(19)式に即して考察する。狭義の級間変動による寄与分の大きさを 規定する

$$\sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t_{X_i}} - \overline{t_X})^2 - (\overline{t_0} \overline{x_i} - \overline{t_0} \overline{x_i})^2 \right\} \left(\frac{\underline{t_{X_i}}}{t N} + \frac{\underline{t_0} k_i}{\underline{t_N}} \right)$$

に着目すると,

$$(\overline{t_{\chi_i}} - \overline{\overline{t_{\chi}}})^2 - (\overline{t_{\chi_i}} - \overline{\overline{t_{\chi}}})^2$$

が負になる(すなわち,比較時点における階級別 平均と総平均との乖離が基準時点よりも小さく なる)階級があれば、それは(狭義の)級間変動を押し下げる作用を果たす(逆も同じ)。

同様に、構造的変化の寄与分を示すとされ る

$$\sum_{i=1}^{\underline{m}} \left(\frac{{}^t k_i}{{}^t N} - \frac{{}^0 k_i}{{}^0 N}\right) \left\{\frac{(\overline{{}^t x_i} - \overline{\overline{{}^t x}})^2 + (\overline{{}^0 x_i} - \overline{\overline{{}^0 x}})^2}{2}\right\}$$

に着目すると,

$$\frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N}$$

が負になる階級が存在すれば(すなわち,比較 時点における階級内個数の構成比が基準時点よ りも小さくなるような階級があれば),それは, 構造的変化の寄与分を減少させる(逆もまた 同じ)。ただし,上で注目した次式

$$\begin{cases} \sum_{i=1}^{m} \left\{ ({}^t \! \chi_i - \overline{{}^t \! \chi})^2 - ({}^0 \! \chi_i - \overline{{}^0 \! \chi})^2 \right\} \left(\frac{{}^t \! k_i}{{}^t \! N} + \frac{{}^0 \! k_i}{{}^0 \! N} \right) \\ \sum_{i=1}^{m} \left({}^t \! k_i - \frac{{}^0 \! k_i}{{}^0 \! N} \right) \left\{ \frac{({}^t \! \chi_i - \overline{{}^t \! \chi})^2 + ({}^0 \! \chi_i - \overline{{}^0 \! \chi})^2}{2} \right\} \end{cases}$$

のいずれについても、その値は、すべての階級によってもたらされた寄与分の総計である。繰り返すが、表10では、変動の主因となった階級を特定することができない。この難点を克服するには、階級別に数値を表章した表5の活用が有効である。このことは、級内変動の変化を読みとるときにも、同様である。①狭義の級間変動と②構造的変化の寄与分を押し上げる(押し下げる)方向に作用した階級を析出するために作成した表11(次頁)は、これまでの数値例(ケースI、II)を入れて作成した表5の一部を抽出して表章している。

表 11 によって、次のことが明らかになる。 すなわち、ケース I では、①狭義の級間変動 の寄与分を押し上げたのは、第 1 階級と第 4階級であること、②構造的変化の寄与分を押 し上げたのは、第 2 階級であること。そして、

表 11 階級別分析表(部分)

	ケース I		ケースII		
階級	$(\overline{t}_{X_i} - \overline{t}_{X_i})^2 - (\overline{t}_{X_i} - \overline{t}_{X_i})^2$	$\frac{{}^tk_i}{{}^tN} - \frac{{}^0k_i}{{}^0N}$	$(\overline{t}x_i - \overline{t}x)^2 - (\overline{t}x_i - \overline{t}x)^2$	$\frac{{}^t k_i}{{}^t N} - \frac{{}^0 k_i}{{}^0 N}$	
1	61.8599	-0.05	157.3479	-0.05	
2	-1.8761	0.15	14.2519	-0.05	
3	-7.0161	-0.05	2.7119	-0.05	
4	185.8039	-0.05	99.5319	0.15	

ケースIIでは、①すべての階級が狭義の級間 変動の寄与分を押し上げたこと、②構造的変 化を押し上げたのは第4階級であること。

また,構造的変化に着目すれば,次のよう に見える。すなわち,ケースIでは,第1階 級,第3階級,第4階級の3つの階級による 押し下げ効果が働いて,全体として構造的変 化の寄与分はマイナス (-13.9575) となって いる(表10参照)。これにたいして、ケースⅡ では、全体として構造的変化はわずかながら 押し上げられ,プラスの数値(3.0821)を示し ていることから(表10参照), 第1階級, 第2 階級、第3階級による構造的変化にたいする 押し下げ効果が軽微であったことが分る。と ころが、階級別の個体シェアの変化 $\left(rac{tk_i}{tN}-rac{{}^0k_i}{{}^0N}
ight)$ だけに注目すれば,ケースIと ケースIIとでは大きな違いは検出されない。 個体シェアの変動よりも級間変動の時点間変 化が大きいほど、構造的変化が大きくなる。 構造的変化を計測する数式について階級別に $\{(\overline{t_{x_i}} - \overline{t_x})^2 + (\overline{t_{x_i}} - \overline{t_{x_i}})^2 + (\overline{t_{x_i}} - \overline{t_{x_i}})\}/2$ を計算してみれば、 このことは明らかになるが,表11からもその 見当はつく。構造的変化の寄与分は個体シェ アの変動だけを反映してはいないのである。

以上のことは次のようにも言うことができる。ケース I では第 2 階級,ケース II では第 4 階級と言うように,階級は異なるが, 2 つ

のケースのいずれにおいても、それぞれの階級に落ちる個体の個数は5から10へと2倍に変化している階級が1つずつある。それにもかかわらず、構造的変化の寄与の大きさが異なる。このこともまた、(19)式によって説明することができる。すなわち、

$$\frac{{}^t k_i}{{}^t N} - \frac{{}^0 k_i}{{}^0 N}$$

が負となっても, それのウェイトとなる

$$\frac{(\overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi}})^2 + (\overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi}})^2}{2}$$

が小さければ, それだけ

$$\left(\frac{{}^tk_i}{{}^tN}-\frac{{}^0k_i}{{}^0N}\right)\!\!\left\{\!\frac{({}^t\overline{x_i}-\overline{{}^t\overline{x}})^2\!+\!({}^0\overline{x_i}-\overline{{}^0\overline{x}})^2}{2}\!\right\}$$

が小さくなり、構造的変化の寄与分が小さくなる。階級内に落ちる個体の構成比(個体シェア)の変化がたとえ同一であろうとも、その階級における個体の数量的規定性の変化が小さければ、構造的変化の寄与分が小さくなる。このことは、構造的変化の寄与分を計測した結果とされる数値が、単に階級を構成する要素にかんする個数の構成比の変化に依存するだけではなく、その要素のもつ数量的規定性の影響から独立ではないことを意味している。このことから、構造的変化の寄与分は「見かけ上」の変動を示すのではなく、階級に落ちる個体の数量的規定性にかんする実質的な

		ケー	スI	ゲースⅡ		
総分散の増加率 (%)		102.7074*		205.1950		
級内変動		46.2700**		98.7459		
寄与度	奇 与 広義の級間変動	狭義の級間変動	56.4374	76.3410	106.4491	102.0541
度 仏我の 秋间 刻	構造的変化	30.4374	-19.9036	100.4491	4.3950	
* 1	* $102.7074 = \frac{142.1536 - 70.1275}{70.1275} \times 100$					

2時点間における差の寄与度 -- 総分散

- $46.2700 = 102.7074 \times \frac{32.4480}{72.0261}$

変動をも反映した実体のある指標と見ること ができる。

付言までにここで、2時点間の差の寄与度 について述べておく。変量をx,基準時点を 0, 比較時点を t とおくとき, 増加率 p は一 般に

$$p = \frac{{}^{t}x - {}^{0}x}{{}^{0}x} \times 100 \,(\%) \tag{22}$$

である。

今、 t_X と 0x をそれぞれの時点における分 散とすれば、増加率 b は総分散の増加率にな る。そして、 d_i を要因iにかんする分散の増 加分,c, を要因iの寄与度とすると,次の比例 関係が成り立つ。

$$(t_X - t_X) : d_i = p : c_i$$

ゆえに寄与度は

$$c_i = p \cdot \frac{d_i}{t_X - 0_X} \tag{23}$$

であたえられる。x は表9に表章された総分 散 σ^2 である。したがって、総分散の増加率は 表9からもとめることができる。また、要因 別の増加分 d_i は表 10 に記載された $\Delta \sigma^2$ で ある。これらの関連数値を(23)式に代入すれば, 総分散の増加率にたいする要因別の寄与度を 得ることができる (表12)。

寄与度の合計は総分散の増加率に一致する

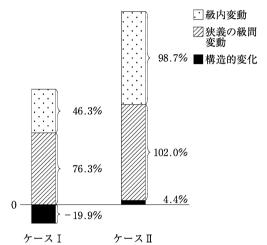


図2 総分散についての寄与度

が,表12からは,総分散の増加率102.7% (ケース I), 205.2% (ケース II) のうち, 級 内変動は46.3% (ケース I),98.7% (ケース II), 広義の級間変動は56.4% (ケース I), 106.4% (ケースII) を説明することなどが分 かる。

また,表12はグラフでも示すことができる (図2)。

5. 総標準偏差の差の分解

(1) 分解式

分散は, 平均偏差の二乗和の平均であるた めに,分散の代わりに平均偏差の実勢に近い 統計量として標準偏差が使用されることが少なくない。そこで、以下では、総分散の差の 分解にかんする考察にもとづいて、総標準偏 差の差

$$\Delta \sigma = {}^t \sigma - {}^0 \sigma$$

の分解式を誘導する。そのために

$$\Delta \sigma^2 = {}^t \sigma^2 - {}^0 \sigma^2 \tag{24}$$

とおく。

これを変形すれば,

$$\Delta \sigma^2 = {}^t \sigma^2 - {}^0 \sigma^2 = ({}^t \sigma + {}^0 \sigma)({}^t \sigma - {}^0 \sigma)$$

となる。ゆえに

$${}^{t}\sigma^{-0}\sigma = \frac{1}{{}^{t}\sigma^{+0}\sigma} \varDelta \sigma^{2} \tag{25}$$

である。この(25)式に(19)式でもとめた $\Delta \sigma^2$ を代入して、整理すれば、総標準偏差の差の分解式として次式を得る。

$$\Delta \sigma = {}^t \sigma - {}^0 \sigma$$

$$\begin{split} &=\frac{1}{{}^{t}\sigma^{+0}\sigma}\Bigg[\underbrace{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{1},t_{k_{2},\cdots},t_{k_{m}}} ({}^{t}x_{ij}-\overline{{}^{t}x_{i}})^{2}}_{tN} - \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_{1},0k_{2},\cdots},0k_{m}}_{0N} ({}^{0}x_{ij}-\overline{{}^{0}x_{i}})^{2}}_{0N} \Bigg] \\ &+ \Bigg\{ \sum_{i=1}^{m} \Big\{ \underbrace{({}^{t}x_{i}-\overline{{}^{t}x})^{2} - ({}^{0}x_{i}-\overline{{}^{0}x})^{2}}_{tN} \Big\} \underbrace{\left(\frac{{}^{t}k_{i}}{tN}+\frac{{}^{0}k_{i}}{0N}\right)}_{0N} \Big\} \\ &+ \sum_{i=1}^{m} \Big(\frac{{}^{t}k_{i}}{tN}-\frac{{}^{0}k_{i}}{0N} \Big) \Big\{ \underbrace{\left(\overline{{}^{t}x_{i}}-\overline{{}^{t}x_{i}}\right)^{2} + ({}^{0}x_{i}-\overline{{}^{0}x_{i}})^{2}}_{2} \Big\} \Bigg] \\ &= \underbrace{\frac{1}{{}^{t}\sigma^{+0}\sigma} \Bigg\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_{1},t_{k_{2},\cdots},t_{k_{m}}} ({}^{t}x_{ij}-\overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0k_{1},0k_{2},\cdots,0k_{m}} ({}^{0}x_{ij}-\overline{{}^{0}x_{i}})^{2}}_{0N} \Big\} \\ &+ \underbrace{\frac{1}{{}^{t}\sigma^{+0}\sigma} \Bigg\{ \sum_{i=1}^{m} \Big\{ (\overline{{}^{t}x_{i}}-\overline{{}^{t}x_{i}})^{2} - ({}^{0}x_{i}-\overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \Big\} \left\{ \underbrace{\frac{t^{k}k_{i}}{tN}+\frac{{}^{0}k_{i}}{0N}}_{2} \right\} \right\} \\ &+ \underbrace{\frac{1}{{}^{t}\sigma^{+0}\sigma} \Bigg\{ \sum_{i=1}^{m} \Big\{ (\overline{{}^{t}k_{i}}-\frac{{}^{0}x_{i}}{x})^{2} - ({}^{0}x_{i}-\overline{{}^{0}x_{i}})^{2} \Big\} \left\{ \underbrace{\frac{t^{k}k_{i}}{tN}+\frac{{}^{0}k_{i}}{0N}}_{2} \right\} \right\} \end{aligned} \tag{26}$$

(2) 数值例

これまで取り上げてきた数値例にかんして,総標準偏差の差を分解したときの,それぞれの寄与分を表にまとめた(表13,14)。

総分散の差にかんする要因別の寄与度(表 12)を計算したときと同様に,総標準偏差についても次のような表を作成することができる (表 15)。

表 13	標準偏差の差の分解

		ケー	ス I	ケースⅡ	
$t\sigma^{-0}\sigma$		3.5486		6.2554	
級内変動		1.5987		3.0103	
亡羊の処理が利	狭義の級間変動	1 0400	2.6376	3.2451	3.1111
広義の級間変動	構造的変化	1.9499	-0.6877		0.1340

(注記) 1. σ は表 9 最下欄に表章。

2. 表 10 の関連数値を $1/(t_{\sigma}+v_{\sigma})$ 倍すれば,各種変動が計測できる。

表 14 標準偏差の差にたいする寄与率 (%)

		ケー	スI	ケースⅡ	
級内変動		45.05		48.12	
広義の級間変動	狭義の級間変動	54.95	74.33	51.88	49.73
	構造的変化		-19.38		2.14
(参考) ^t σ- ⁰ σ		100.00		100.00	

(注記)ケースⅡでは、計算上の誤差のために、狭義の級間変動の寄与率と構造的変化の寄与率の合計が広義の級内変動の寄与率とは一致しない。

		ケース I		ケースII		
総標準偏差の増加率 (%)*		42.3754**		74.6985		
	級内変動		19.0908***		35.9473	
寄与度広義	広義の級間変動	狭義の級間変動	23.2846	31.4967	38.7512	37.1510
	は	23.2640	-8.2121	30.7312	1.6002	
		11370.10		-0.2121		1.0002

表 15 2 時点間における差の寄与度 —— 総標準偏差 ——

- *表9最下欄の参考値参照。
- ** $42.3754 = \frac{11.9228 8.3742}{8.3742} \times 100$
- *** $19.0908 = 42.3754 \times \frac{1.5987}{3.5486}$

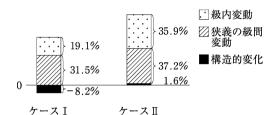


図3 総標準偏差についての寄与度

また**,**表 15 はグラフでも示すことができる(図 3)。

す: す び

以上,本稿では,原系列を対数変換して作成される計測指標に固有の難点を回避する目的で,対数変換によることなく元のデータそのものから計算される分散を取り上げ,その要因分解の可能性を検討した。そして,対数変換しない分散を用いても,原系列の変動にかんする要因分解が可能であることを述べた。これを(19)式(再掲),すなわち

$$\begin{split} \varDelta \sigma^2 = & \left\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{k_1, k_2, -i, k_m} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_i}})^2 - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0 k_1, 0 k_2 - 0 k_m} (0_{\chi_{ij}} - \overline{0_{\chi_i}})^2 \right\} \\ + \sum_{i=1}^{m} & \left\{ (\overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi}})^2 - (\overline{0_{\chi_i}} - \overline{0_{\chi}})^2 \right\} \begin{pmatrix} \frac{t_{k_i}}{t_i} + \frac{0 k_i}{0 N} \\ \frac{t}{2} \end{pmatrix} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{k_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{k_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{k_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{k_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{0 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{1 k_i}{0 N} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi_i}} \\ \frac{t_{\chi_i}}{2} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \\ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \\ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \\ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \left\{ \frac{t_{\chi_i}}{t_i} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \right\} \begin{pmatrix} \overline{t_{\chi_i}} - \frac{t_{\chi_i}}{t_i} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} \end{pmatrix}}_{\text{BD}} & \underbrace{\sum_{i=1}^{m}$$

によって要約的に述べる。とくに,(19)式を取り上げるのは,「見かけ上」の変動をもたらすとされる構造的変化がこの式によって計測されるからである。

再掲した(19)式は、①狭義の級間変動が積

$$\left\{ (\overline{{}^t x_i} - \overline{{}^t x})^2 - (\overline{{}^0 x_i} - \overline{{}^0 x_i})^2 \right\} \left(\underline{\frac{{}^t k_i}{{}^t N} + \frac{{}^0 k_i}{{}^0 N}}{2} \right)$$

の和としてあたえられ,また,②構造的変化 は積

$$\left(\frac{{}^tk_i}{{}^tN}-\frac{{}^0k_i}{{}^0N}\right)\!\!\left\{\!\frac{(\overline{{}^t\chi_i}-\overline{{}^t\chi})^2\!+\!(\overline{{}^0\chi_i}-\overline{{}^0\chi})}{2}\!\right\}$$

の和としてあたえられることを示している。 ただし、ここで注意すべきは、すべての階級 において

$$\frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N} = 0$$

となるとき,すなわち,全階級をつうじて個体シェアが変化しないときに限って,(19)式は

$$\begin{split} \varDelta\sigma^{2} = & \left\{ \frac{\sum\limits_{i=1}^{m} \sum\limits_{j=1}^{k_{1}, k_{2, -}, k_{m}} ({}^{t}\chi_{ij} - \overline{{}^{t}\chi_{i}})^{2}}{{}^{t}N} - \sum\limits_{i=1}^{m} \sum\limits_{j=1}^{m, k_{1}, k_{2, -}, 0_{k_{m}}} ({}^{0}\chi_{ij} - \overline{{}^{0}\chi_{i}})^{2} \right\} \\ & + \sum\limits_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{{}^{t}\chi_{i}} - \overline{{}^{t}\chi})^{2} - (\overline{{}^{0}\chi_{i}} - \overline{{}^{0}\chi_{i}})^{2} \right\} \left(\frac{{}^{t}k_{i}}{tN} + \frac{{}^{0}k_{i}}{0N} \right) \end{split}$$

$$\begin{split} &= \left\{ \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{t_{k_1, t_{k_2, \cdots}, t_{k_m}}} (t_{\chi_{ij}} - \overline{t_{\chi_i}})^2 - \sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0_{k_1, 0}} \sum_{j=0}^{\infty} (0_{\chi_{ij}} - \overline{0_{\chi_i}})^2 \right\} \\ &+ \sum_{i=1}^{m} \left\{ (\overline{t_{\chi_i}} - \overline{t_{\chi}})^2 - (\overline{0_{\chi_i}} - \overline{0_{\chi}})^2 \right\} \cdot \frac{0_{k_i}}{0 N} \end{split}$$

となり、 $\Delta \sigma^2$ は級内変動と狭義の級間変動の みに分解される。

他方で, すべての階級において

$$(\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{\overline{x}})^2 - (\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{\overline{x}})^2 = 0$$

となるとき, すなわち, 全階級をつうじて時 点間の級間変化がないときに限って, (19)式は

$$\begin{split} & \varDelta \sigma^2 \! = \! \left\{ \! \frac{\sum\limits_{i=1}^{m} {}^{t_{k_1} t_{k_2, \cdots} t_k m} ({}^t x_{ij} \! - \! \overline{t}^{-} \overline{x_i})^2}{tN} - \! \sum\limits_{i=1}^{m} \! \sum\limits_{j=1}^{n} \! \sum\limits_{i=1}^{N_{k_1, 0} t_{k_2, \cdots} n_k m} \! ({}^0 x_{ij} \! - \! \overline{0} \overline{x_i})^2} \right\} \\ & + \sum\limits_{i=1}^{m} \! \left(\! \frac{t_{k_i}}{t_i N} \! - \! \frac{{}^0 k_i}{0N} \right) \! \left(\! \frac{(\overline{t_{X_i}} \! - \! \overline{t_X}})^2 \! + \! (\overline{0} \overline{x_i} \! - \! \overline{0} \overline{x_i})^2}{2} \right) \\ & = \! \left\{ \! \sum\limits_{i=1}^{m} \! \sum\limits_{j=1}^{k_{k_1, t_{k_2, \cdots} t_k m}} \! ({}^t x_{ij} \! - \! \overline{t_{X_i}})^2 - \! \sum\limits_{i=1}^{m} \! \sum\limits_{j=1}^{n_{k_1, 0} t_{k_2, \cdots} n_k m} \! (\! 0 \! x_{ij} \! - \! \overline{0} \overline{x_i})^2 \right) \\ & + \sum\limits_{i=1}^{m} \! \left(\! \frac{t_{k_i}}{t_i N} \! - \! \frac{0 \! k_i}{0N} \right) \cdot (\overline{0} \overline{x_i} \! - \! \overline{0} \overline{x_i})^2 \end{split}$$

となり、 $\Delta \sigma^2$ は級内変動と構造的変化のみに 分解される。

しかし,

$$\frac{{}^{t}k_{i}}{{}^{t}N} - \frac{{}^{0}k_{i}}{{}^{0}N} = 0$$

が成立していない階級が存在する場合には, 計測したとされる狭義の級間変動は,その階 級における個体シェアの変化の影響を受ける ことになる。

また,

$$(\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{x_i})^2 - (\overline{t}_{x_i} - \overline{t}_{x_i})^2 = 0$$

が成立していない階級が存在する場合には, 計測したとされる構造的変化は,その階級に かんする時点間級間変化の影響を受けること になる。この場合には,構造的変化は,ただ 単に全体に占める階級内個体数の比率の変化 だけを反映する指標ではなくなってしまう。 このことは、構造的変化が「見かけ上」の分 散の変化をもたらすのではなく、少くとも一 般に

$$(\overline{t_{x_i}} - \overline{t_x})^2 - (\overline{t_{x_i}} - \overline{t_{x_i}})^2 = 0$$

が成立しない場合には, $(tx_i - tx)^2 \\ \ge (tx_i - tx)^2$

なお、本稿では上に述べたことと関連させて、最終的に検出される総分散の変動だけからは、その変動をもたらした階級を特定することはできないこと、そして、この特定には 階級別の分析が必要であることを述べた。

最後に、本稿では、総標準偏差の差の分解 式を誘導した。分散は偏差の平均的な平方で あるのにたいして,標準偏差はその平方根で あり、それだけ実勢に近い数値があたえられ ると期待できるからである。しかしながら, その場合, 要因分解されたそれぞれの寄与分 には、比較される2つの時点における標準偏 差の和の逆数 $(1/(t_{\sigma}+o_{\sigma}))$ が掛けられてい る。そのために、総分散の差の分解のときに は, 広義の級間変動の分解によって析出され る①狭義の級間変動と②構造的変化の2つの 寄与分のいずれもが,一般に,時点間級間変 化と階級別個体シェアの合成として得られる のにたいして, 総標準偏差の差の分解によっ て算出される①と②の2つの寄与分にあって は、総分散のときと同様に2つの寄与の合成 としてあたえられるだけでなく, さらに2つ の時点における変動(標準偏差) ――より厳 密には ${}^t\sigma$ と ${}^0\sigma$ の和の逆数 — が影響をあ

たえることになる。また,級内変動(狭義の級内変動と構造的変化) の寄与分にたいしても同様に, $^t\sigma$ と $^o\sigma$ の和の逆数が影響をあたえていることを

$$\varDelta_{\pmb{\sigma}} = \frac{1}{{}^t \sigma^{+0} \sigma} \left\{ \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{t_{k_1} t_{k_2 - t_{k_m}}} ({}^t \chi_{ij} - \overline{{}^t \chi_i}}^t)^2}_{t_{N}} - \underbrace{\sum_{i=1}^{m} \sum_{j=1}^{0} ({}^0 \chi_{ij} - \overline{{}^0 \chi_i}}^t)^2}_{0_{N}} \right\}$$

$$\begin{split} &+\frac{1}{{}^t\sigma^{+0}\sigma}\left\{\sum_{i=1}^m \left\{(\overline{\iota_{x_i}}-\overline{\iota_{x}})^2-(\overline{{}^0x_i}-\overline{{}^0x})^2\right\}\left(\frac{{}^tk_i}{{}^tN}+\frac{{}^0k_i}{{}^0N}\right)\right\}\\ &+\frac{1}{{}^t\sigma^{+0}\sigma}\left(\sum_{i=1}^m \left(\frac{{}^tk_i}{{}^tN}-\frac{{}^0k_i}{{}^0N}\right)\left(\frac{(\overline{\iota_{x_i}}-\overline{\iota_{x}})^2-(\overline{{}^0x_i}-\overline{{}^0x})^2}{2}\right)\right\} \underbrace{(26)$$

$$\mp \frac{1}{2}\left(\frac{{}^tN}{{}^tN}+\frac{{}^0N}{{}^0N}\right)\left(\frac{{}^tN}{{}^tN}-\frac{{}^0N}{{}^0N}\right)\left(\frac{{}^tN}{{}^tN}-\frac{{}^0N}{{}^0N}\right)^2\right\} \underbrace{(26)}_{\pi}$$

は示している。